



知っているようで意外と知らない、美術館の“なかみ”をアートコミュニケーター「～ながラー」の舟（チーム）『LINK・MEET丸』のメンバーがインタビューを通してリサーチします。

今回の
あの人
・
この人

アーティスト・イン・ミュージアム AiM
Vol.11 招へい作家

横山奈美 さん

横山 奈美 / YOKOYAMA Nami

1986年 岐阜県生まれ

2010年 愛知県立芸術大学 油画専攻卒業

2012年 愛知県立芸術大学大学院 美術研究科 油画版画領域修了

《forever》は1日1枚、芝生に寝そべる自分の姿を描いていくドローイング作品。

今回の公開制作では、2020年に描いた《forever》の7日目の絵を見ながら1日目の絵を描き、前の日の絵を見て描くという行為を毎日30日間続けました。

公開制作中の横山奈美さんにLINK・MEET丸のメンバーがインタビューをしました。

2021/November-December

01 今回の公開制作についてうかがいました！

今回の作品が生まれた背景を教えてください。

もともと昨年のお展で1週間分の作品として発表したものです。美術館に訪れた際、庭の芝生を目にし、繋がるなと思いました。1日1枚描くという今作品のスタイルも、滞在制作という企画に合うと考え決めました。この作品はコロナ禍の中、何気なくしていた落書きから生まれたものです。無意識に描いた少女が芝生に寝転がる姿にふと、どうして自分はこれを描いたのだろうと思考を巡らせることとなって。芝生に寝転がるという行為は、誰にでも出来ること。見過ごされてしまうような些細な日常の行為さえ、思うように出来なくなっている状況下に、特別でなかったことが特別になってしまっていると気がつきました。そんな自分との対話を通し、「ただ寝転ぶ」という様が連続していくイメージが浮かび、作品へと繋がったように思います。



前日描いた絵でちょっと違ったなと思うところを、次の日に修正していくことはありますか？

毎日、次の日に比べて見たときに、顔の色が違ったり、表情が違ったり、いろいろ変わっていることに気がつくんですが、それは受け入れます。

そこにあるすべてを受け入れて描く。前日の作品が他と比べて違っていたとしても、それを見て描き続けることを大事にしています。



作品中の女の子は、横山奈美さん本人をイメージして描いたのですか？

そうですね。《forever》で描いている少女は私自身です。学生時代からこの自画像を描いています。小学校高学年から中学生時代を思い出しながら描いています。

今回30日間も同じ絵をずっと描き続けられるモチベーションはどこからくるのですか？

30日後が見たい、それが一番ですね。頭の中にあるときは霧がかかったようではっきり見えないんですが、それを見たくて。もしかしたら自分では予想もつかない風景を見られるかもしれない。毎日続けていくという作品は浮き沈みのないつまらないことに感じるかもしれないんですけど、つまらないって何だろうとか、反対に楽しいこと美しいことって何だろうと考えていく作品なんです。そういうことが見る人に伝わってほしいなという願いがモチベーションになっています。続けていると、現実の自分のコンディションと絵の中の自分が繋がってくる感覚があって、私という身体が絵を作り出していると実感します。

《forever》の女の子が一切笑っていないのは何故？

一人で散歩をしたり、公園のベンチなどで休憩したりするとき、私たちは無表情だと思います。笑ったり、怒ったり、悲しんだりしていない無表情な顔が最も日常的で自然な表情だと考えています。

作品のタイトルにはどんな思いがあるのでしょうか？

「forever」という言葉にしたのには様々な気持ちがあります。まず、自分が死ぬまでずっと描いていきたいということ。もちろん私が死んだら「forever」にはならないんですけどね。それでも永遠なんてないとわかっていても、何でもない日常がずっと続くことを私たちは願ってしまう、叶わないとわかっていても願ってしまう、そんな人間のどうしようもない気持ちを象徴する言葉としても使っています。AiMでは30日間毎日描いていくのですが、その30日目とまた1日目に繋がる、そんなイメージもあると思っています。

服のforeverの書体が毎日違っているのは何か理由があるのですか？

フォントについてはまだ自分でもはっきりと答えは出ていませんが、同じフォントをずっと繋げていると同じ日が繰り返されているように見えますが、フォントを変えると「着替えたのかな」「1日経ったのかな」とか思いますよね。それでまた新たな「forever」が始まる、「forever」が生まれ変わって続いているように表したかったのかもしれない。

鑑賞者から、よく聞かれる質問はありますか？

「毎日、同じ絵を見ながら描くことは、飽きませんか？」と聞かれることがあります。私にとって《forever》を描くことは、毎日の食事や掃除と同じです。起伏があるものに人は反応しやすいけれど、ありふれた日常に目を向け、面白さや美しさを見つけ出したいと思っています。

今回の公開制作で心に残ったことは何ですか？

県図書館で勉強した高校生たちが帰りに寄って制作過程を見てくれるんです。1人の学生から「横山さんの描く人物はまるいフォルムで、《forever》とリンクしている。人間の形からforeverを感じた。」という感想を頂き、改めて自分の描く形について考えさせられました。異なる道を歩んできた方々と、作品を通してコミュニケーションできる、それが面白く、うれしかったです。

初めて公開制作に挑戦された感想は？

見に来ていただく方にこの作品の証人になってもらおう空間にしたいと思っています。制作しているこの時間そのものも作品にしたいと思っています。

02 横山さんご自身のことや、制作についてもうかがいました！

横山さんが作品制作において、貫いているコンセプトみたいなものはありますか？

例えば美しさは何？という問いがあります。美しさってどんどん変化してきていると思うんです。美しさや価値は、誰かが決めている。でも、自分で美しさを決められたら、もっと生きやすくなる。私たちが普段何気なく使っている言葉や価値観を一回捉え直す、そういう作品を作りたいなと思っています。



これからは、どんな制作をしていきたいと思っていますか？

ネオンシリーズは、今まで自分の肉筆の形をネオンで作り、それを見て描いていました。次は、Historyという言葉を経験した方々に書いてもらう方法で描いていきたいと考えています。30点くらい並べて展示したいです。《forever》のシリーズは、もっと生活に近いような場所や海外など、いろいろな場所で描いていきたいなと思っています。

「芸術やアートって何ですか？」と問われたら、横山さんなら何と答えますか？

難しい質問ですね、1週間ぐらい考えたいです。「アート」を自分の仕事、と置き換えて答えるなら、自分の作るもので新しい視点の提案ができること、ですかね。「美しさってなに？」とか「価値のあることとは？」という疑問は頭によぎることはあっても、改めて考えることは少ないと思います。視覚的な情報でそうした問題に立ち戻ることができ、それぞれの人にとって、大切なものに気づききっかけを得られるもの、だと思います。

横山さんは子どもの頃、どのようなお子さんだったのでしょうか？

小学校後半から中学校くらいの自分自身を10年前から描いています。その頃は、ちょうどブリトニー・スピアーズがすごく流行っている時で。誰もいない自分の部屋で、ちょっとダンスの練習をしてみたりしていました。そんなに明るい子供ではなくて、少し消極的だったと思います。私はアメリカ文化からかなり影響を受けてきて、それが今の制作活動に大きな影響を与えています。キラキラしたブリトニーに憧れつつ、彼女には絶対なれないという、どうしようもない絶望を抱えながら、モヤモヤしていた学生だったと思いますね。



なぜ写実画を描くのですか？

※写実画とは、デフォルメや単純化などをせず、物体の見たさまをそのまま絵として表現したもの。

写実をするようになったのは大学院2年生ぐらいからです。岸田劉生展を観たのがきっかけです。セザンヌなど印象派の画家に影響されたのがわかるような初期の作品を観たときに、私が(かつて)ブリトニー・スピアーズに憧れた気持ちと重なるように思いました。時代が変わってもそういう憧れの気持ちはあるのだと。それから、日本近代の画家たちの静物画をよく見るようになりました。彼らの作品からは憧れと現実のせめぎ合いを感じます。

私も憧れと現実を受け入れるところからはじめようと思い、物を見て描くことを始めました。



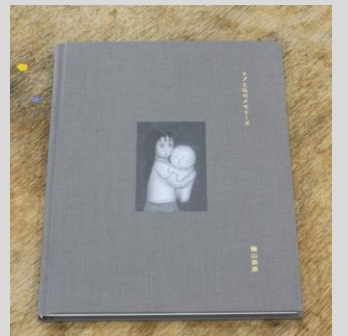
《LOVE》2018年、撮影：若林勇人
《painting》2020年、撮影：若林勇人

今は憧れている人はいますか？

私の作品は、「叶わない憧れ」からどう前に進んでいくかが原点となっています。過去猛烈に憧れたブリトニー・スピアーズや、絵画自体も、日本に輸入されてきたものじゃないですか。私が絵画を描き始めたことも、私が好きになるものも、日本に元々あったものではなく、全て海の向こうから渡ってきたもので、完璧に習得することが不可能だという前提がある。それを自分がどう消化し生きていけるかを考えています。「憧れ」というキーワードは自分の中で重要で、こういう作品を描いているからこそ、特定の人への憧れは今はないですね。

「ラブと私のメモリーズ」に出てくる「ラブ」のモデルはありますか？

モデルは無いです。人がかわいいと思うように品種改良をされた犬は、病気がちで、短命な事があります。愛するために、その犬と暮らそうと思って飼うのに、それは果たして愛なのかな？という疑問が出発点になっています。自分が以前飼っていた「フラットコーテッド・レトリバー」が「ゴールデン・レトリバー」の人気に押され、絶滅寸前になった事がありました。自分が飼っていた犬が、人間の何かを愛したいという欲求によって、絶滅しそうになったという過去を知った時、愛することについてそれを形にしたいと思いました。



「ラブと私のメモリーズ」2020年

03 おわりに

今回は、LINK・MEET丸に所属する、総勢10人の～ながラーでインタビューを行いました。

新しく加わったメンバーが多く、緊張しつつ手探りで挑んだインタビューでしたが、インタビュー中、横山さんが質問者ひとりひとりとしっかり向き合い、丁寧に言葉を選んでお答えくださったことで、楽しく、そして興味深いお話をお伺いできました。また、横山さんの真摯な人柄をととてもよく感じる事ができた貴重な時間となりました。

横山さん、制作期間のお忙しい中にも関わらず、インタビューにお答え頂きありがとうございました！



『LINK・MEET丸』メンバー

さくら / かおり / ヨシハラ
ゆき / ひらっち / ケイコ
さわこ / かずみん / タナカ / はま
(順不同)

～ながラーのあの人・この人インタビュー No.4